

ひどい風邪をひいて考えたこと

わたなべとしお
渡辺利夫（拓殖大学学長・塾員）

年齢のせいなのか、今年の風邪はひどかった。熱が下がらず下痢を繰り返して、とうとう一週間近く臥せったままだった。こんな風邪、ひいたことはない。老齢にいたって免疫力やら快復力やらがとみに衰えたとみえる。新聞やテレビをみる気が起きない。本など見向きさえしない。ただぼろと寝ているだけだ。たかが風邪だというのに、病いというものがかくも人間の欲望の水位を下げてしまうものかとわれながら呆れる。癒えてみれば、欲望のない人間などただのドンガラ、欲望をありありと自覚し欲望にしたがって生きることが人生の幸せだという、いとも簡単な真実に改めて気づかされる。

人間とは欲望の塊である。しかしここに一つの逆説がある。欲望はこれが満たされれば、途端に消失してしまう。欲望は充足されればそもそも欲望として自覚されることはない。逆に、欲望をはつきりと自覚するには、欲望それ自体が抑圧されねばならない。性的放縦のものに性への渴望は薄く、禁欲者において性的欲求はまごうことなく自覚されるという「背理」が真実なのである。

権威や規範を拒否して自由に生きることはいかにも潔いようにみえるが、そうした生き方は、自分の本当の欲望の自覚を妨げてしまうという重大な逆説を潜めている。いや、待てよ。権威や秩序がしつかりとした社会の中で育った人間であればこそ、そこから自由になりたいという強い欲求が生まれてくるわけだから、これは自由へのまぎれもない欲望だと解すべきかも知れない。

権威や規範それ自体が希薄化しているというところにこそ、現在の真の

問題がありそうだ。数学や英語の嫌いな学生がふえている。数学や英語の学習はかつてであれば大学生にとつては「理屈抜き」の規範であり、教師たちも権威をもつて教え込まねばならないと考えていたものだが、現在の学生たちの数学、英語嫌いは、教え込まれていやになったというのではなくて、難しいことはただ「やりたくない」というだけのことらしい。数学や英語ができなくなつて別に飯が食えないわけではない。要するに欲望それ自体が漠然としてしまつているのである。

学生たちを教えるようになって四十年が経つ。この間、学生の知的レベルは着実に下がってきたと感じる。分数の足し算、引き算のできない学生がなんと工学部に入學しているという話も耳に入ってくるが、おそらく事実なのである。

知的レベルといえば、疲れて家に帰り、みることもなくテレビをつけ、チャンネルを回していくと、芸能人というのかタレントとのか、若い芸人た

ちがシナリオもまるでないようなおふざけにふけつていて、別のチャンネルに切り替えてもほとんど同じような趣向の番組ばかりである。私の学生たちもこんな番組を飽かずみているのだろうか。知的レベルといった用語で語るのもあほらしくなるほどの低劣さである。

私は、初めは権威や規範の喪失が現代人の欲望の低下を招いたといったふうなことを書くつもりでこのエッセイの筆を執つたのだが、書いていくうちに権威や規範を拒否するというのではなく、権威や規範などには、はなから関心がなく、ただ欲望を無秩序に放出しているだけの存在が現在の多くの若者なのではないかという「結論」になつてしまつた。

「父権喪失の時代」といわれてすでに久しい。社会が権威と規範を取り戻すには、まずは家族の中で権威と規範を回復し、子供たちの欲望に、ある方向性を与えなければならぬのではないかと思うのである。